ヒロとサキ

連続移住小説

hiro&saki 移り住む先、弘前。

連続移住小説　ヒロとサキ

一話　下北沢のヒロ

Ⅰ　下北沢

バイトをやめてきた。
下北沢駅の改札を出ると、駅前はいつものようにすごい人だ。
狭い道を行列のようにみんなが歩いている。
淡島通り方向に行こうとするが、なかなか前の人を抜けない。
こんなにたくさんの通行人がいるけれど、オレが今日バイトをやめたことを知っている人は誰一人いない。
当たり前だけれど。
前を行くカップルの足並みに、オレの足並みが自然と揃ってしまう。
数ヵ月前までは、前のカップルみたいに、オレもサキといっしょに2人でこの道を歩いていたんだけれど。
こんなことを知っている人も誰一人いない。

当たり前だけれど。
バイト先の店長は、「あ、そう。書類にサインしといてね」で、おしまいだった。
良かったとでも思っているような、そっけない態度。
オレのやる気のない働きぶりだったら、そういう反応も無理はないだろう。
遅刻も多かったし。
引き留められるとでも思っていたのか、お前！と自分でつっこんでみる。
角を2回曲がって裏道に入ると、さすがに人は減ってきた。
もうすぐ夕方になりそうな日差しだ。
影が長くなってきた。
鉢植えの背の高い植木が2、3本置いてある、民家風の店の前で立ち止まる。
ブックカフェ「伊十堂」だ。
ドアを開ける。
鈴がチリンと鳴る。
壁には木製の本棚が一面に備え付けてあり、色とりどりの背表紙がこちら

を向いて、お客を迎えてくれる。
ここはオレとサキが出会った場所であり、待ち合わせをした場所であり、メシを食った場所であり、くつろぎの午後を過ごした場所であった。
「やあ、ヒロ」と店長が挨拶してくる。
店長とは古くさい呼び名だが、なぜか店長顔しているので、こう呼んでいる。
「こんちは、店長」
いちばん奥の席に進む。
「コーヒーね」
「ああ」
クッションのあまり効かなくなった椅子に座り、カバンの中から、しわの寄った茶色の封筒と小冊子を取り出し、テーブルの上に置いた。
封筒は1ヵ月前に届いたサキからの手紙。
小冊子は弘前市への移住情報をまとめた薄手のパンフレットだ。

Ⅱ　手紙

「私、弘前に行く」と、サキが言い出したのは3ヵ月前のことだった。
突然だった。
オレと別れるつもりなのかと驚いたが、心のどこかで納得もしていた。
美術大学を出たオレは、アーティストとしてやっていくと決意し、就職はしなかった。
毎日毎日作品づくりに没頭していた。
しかし燃えていた期間は案外短かった。
つくっても、つくっても作品は評価されない。賞とも縁がない。
時間とお金をつぎ込んで、やっとの思いで開いた個展には、学生時代の友人しか来なかった。
才能がないのかな、オレ。だんだんそう思うことが多くなってきた。

生活費を稼ぐために、いくつかのバイトを掛け持ちしたが、本気で働く気にはなれなかった。
そのことは態度に表れていたのだろう。
バイト先の評判も悪く、親しい仲間もできなかった。
うまく世渡りする才覚もないのかな。
そんな中で、サキだけが応援してくれていた。
「今は芽が出ていないけれど、このまま続けていれば、きっと将来認められるよ。ゴッホだって、ルソーだって、最後には認められたんだから」
「ふん、死んでからスゴイって言われてもしょうがないんだよ。今評価されたいわけ、オレは。現代美術の現代って、今なんだよ」
何というひどいことを言ったんだろう。
オレのことを気に掛けてくれるたったひとりの人なのに。
「会社に勤めようかな」
「まだ諦めるのは早いってば」

「サキは気楽だよ」
そんな煮詰まった状況が2人を包みだした時、サキが下した結論が、弘前行きだったのだ。
サキの実家が弘前市にあることは知っていたが、行ったことはなかった。
弘前市については、青森県にあるリンゴの名産地、くらいのことしか知らなかった。
「いっしょに行く？」と誘ってきたのだが、断った。
東京でこそ、最先端の情報に触れられる。
世界と差のないアートがつくれる。
田舎に行ったら、遅れてしまう。と心の底から思っていた。
オレが断ったら、荷物をまとめて、あっという間に弘前に引っ越して行ってしまった。
下北沢の駅で見送った。東京駅までも行かなかった。ごめん。
これでおしまいか、と思った時、サキから手紙が届いたのだ。

ヒロへ
元気にしてる？
ようやく春がやってきました。

弘前での生活にも少しずつ慣れてきました。
こちらでのゆっくり流れる時間は
ちょっと懐かしいです。

東京での生活も懐かしい。
ヒロとの生活も。
私なりに先のこと考えたよ。

ヒロ。
弘前で待ってます。
またね

サキ

何度も何度も読み返したから、もうしわくちゃになった手紙をもう一度読み返し、うなずいた時、コトンと音がした。
店長がテーブルにリンゴを置いたのだ。
「これ、差し入れ。サキちゃんが送ってくれたんだよ。1箱も」
何という気遣い。この店にまでリンゴを送ってくるなんて。
その時、向こうで堅実に暮らしているサキの姿が浮かんだ。
しっかりしているなあ。
「店長、ありがとう」
店を出ると、夕焼けの雲が燃えていた。
そのバラ色に輝く空に向かって、オレはリンゴを投げた。
高く、高く。

つづく

連続移住小説　ヒロとサキ

二話　アップルパイな午後

Ⅰ　アップルパイ

シュッ、シュッ。ザッ、ザッ。

スケッチノートの粗い紙の上を、４Ｂの鉛筆が滑っていく音が、部屋中に響いている。

ここはヒロのアトリエだ。といっても改装途中で、アトリエに変身中のリビングルームといった風情。

しかし広い。都内だったら、家賃だけで数十万円するんじゃないか、という冗談をよくいっている。いや冗談でなく、本当にそうだろう。

そう、とうとうヒロは弘前市に、引っ越してきたのだ。

ここで気兼ねなく大作に挑戦できる、と意気込んでいる。

となりのキッチンでは、サキがオーブンの中をのぞいている。

「ヒロッ！」

「うん？」
「ヒロッ！」
「うん？」
「ヒロッ！」
「何、サキ？」
「ヒロッ！」
「何、サキ？」

ヒロは鉛筆を動かす手をとめない。顔もノートに向けたままで、生返事をくりかえす。

付き合ってから長い時間がたっている二人は、ベテラン夫婦のように、お互いが空気のような存在になってきている。

サキに意地悪心がわきたってきた。

「ヒロッ！」という声をだんだん小さくしながら、ヒロに静かに近づいていく。そして突然「ヒロッ！」と耳元で大きな声。

「うわっ」

びっくりしたヒロの目の前にアップルパイ。できたての匂いと湯気があたりに漂っている。

「休憩しようよ」
「しようか」
「今日はサクサク系にしてみたの、どう？」
「うまい、うまい」

手づくりアップルパイでひと休み。何だか幸せな時間。

弘前に来てからサキはアップルパイに目覚め、くりかえし焼いている。

リンゴは、おばあちゃんのリンゴ園からもらったものだ。

東京では食べたことのない品種もいくつかある。リンゴそのものの味がいいせいか、とてもおいしい。

また腕もいいのか、どんどん進歩している。

ゆくゆくはパン屋を開こうと思っているサキ。

これは十分に目玉商品になる、とヒロは思っている。

この家の一角を改装して、「ブーランジェリー・サキ」にしようという計画だ。

ヒロは、その看板をつくるよ、と約束していた。

実はさっきからスケッチしていたのは、その看板のアイデアだったのだ。基本は大きな一枚の板で、周囲にこぎん刺しのイメージをちりばめる。そんなデザインを考えている。

Ⅱ　手仕事

こぎん刺し。

弘前に来て気づいたのが、手仕事という領域が、実に深く広く残っていることだった。いや、残っているという言い方はちょっと違う。日常に普通に生きている、と言うべきか。

東京にいた時は地方の特殊な人が、文化遺産的に細々と行っているものと思っていたのだが。こぎん刺しの他にも、津軽塗、津軽焼、津軽裂織、下川原焼土人形、あけび蔓細工、ブナコ、津軽打刃物、津軽凧など、たくさんの工芸品がつくられている。

バイオリンをつくっている人もいる。

いろいろな手仕事に触れたオレは、だんだん自らの制作に対する考え方にも影響が出てきていることを自覚している。

ひとつひとつをじっくり研究する余裕はまだないが、たぶんそれぞれに奥深い世界があり、それと自分の世界をミックスさせることによって、何か新しいものが生まれるのではないか、という予感がしているのだ。

若い職人さんもけっこういて、何人かと知り合った。
話をしていると、話題は尽きない。どの人も面白く、いろいろ考えている。生活の面とか、実際的な情報交換もできて、とても役立つし、刺激にもなる。東京にいた時よりも、創作意欲は、どんどん膨れ上がっている。思ってもみなかったことなのだが。

Ⅲ　弘前めぐり

住む所は、サキが決めていた。築三十年の一軒家だった。
ずっと空き家だったらしい。誰も住まないと家が傷んでしまうので、借りてくれるだけでありがたい、ということのようで、家賃はかなりの格安。
改装してもいいという条件もうれしい。古いけれどとても広い一軒家だ。

オレもそこに一緒に住むことにした。
引っ越してすぐにしたことは、まずは弘前ってどんなところか、動物が縄張りの範囲をめぐるように弘前中を見てまわることだった。
第一に存在感があるのが、岩木山。津軽を代表する山だ。そこかしこから見える。ここに来てからは、毎日見ている。実はうちの窓からも見えるのだ。季節によっていろいろな表情を見せてくれる。一日に一回見ないと、落ち着かなくなるような状態になりつつある。
東京にいた時は、山を見ることなんて、年に一回あるかないかだったのに。
まだ登ったことはないが、ふもとの辺りはたまにドライブしている。
美しい姿だ。
春には桜を見た。桜って、植物なんだなあって、改めて思うほどの圧倒的な色だった。
弘前公園にあるお濠に、桜の花びらが雪のように散り積もって、水面を覆い尽くすのを見たのだが、一面桜色のその幻想的な光景は、ちょっと忘れられない。
遭遇できたのは運が良かったらしい。

建築家、前川國男の設計した建物が数多くあるのにも驚いた。ル・コルビュジエの系統のモダニズム建築の中に実際に入って見学できる。これはうれしいことだった。

そんな弘前めぐりの中で出会ったのが、こぎん刺しだったのだ。

あるクラフトフェアがあり、そこに出店していた店先の小物を見て、

「これは何ですか」

「こぎん刺しです」

「面白い柄ですね」

「ぜんぶ手で刺しているんですよ」

「へえ、手で」

もともとは江戸時代の農民たちが、麻の着物の補強と保温のために、木綿で刺繍したもの。幾何学的な模様をくりかえし手で刺していく。

日常の中から生まれた美だ。伝統的な模様の他に、現代のオリジナル模様もふえているらしい。

手でつくる。東京にいたころは頭ではわかっていたのだが、ここでは暮らしの中で体感している。その精神を受け継ぐ宣言として、看板にこぎん刺し模様を取り入れようと決めたのだ。

それともうひとつ。

今、住んでいる家も、自分たちの手で、つくり変えようと思っている。

リノベーションというらしい。

住みながら、少しずつ改装していくつもりだ。お金の節約の意味もあるが、自分たちが住む家は、自分たちでつくっていく、というのは、究極の手づくりではないか。こう考えたのだ。

時間はかかるかもしれない。でもすべてが思い通りになる。自分たちの味、色がすべて出せる。そう思う。

今はオレのアトリエに取りかかっているけれど、次はパン屋のエリアだ。

乞うご期待。

つづく

連続移住小説　ヒロとサキ

三話　代官町で待ち合わせ

Ⅰ　サキの杞憂

店内はナチュラルな服と雑貨でいっぱいだ。

ワタシは弘前に来る前に、ちょっと心配していた。それはおしゃれな店がないんじゃないか、ということ。

下北沢に住んでいたころは、雑貨屋やカフェをめぐるのが楽しみだった。弘前に行ったら、そんなこともできなくなるのかな、と思っていた。

杞憂でした。あります、おしゃれな店。

洋服屋さん、雑貨屋さん、家具屋さん、カフェ、喫茶店、フレンチレストラン、パティスリー、パン屋さん、和菓子屋さん、などなど。

どこもセンスが良くって、本格的。店の中にいると、ここは東京かと思うほど。

いや失礼、東京をおしゃれの基準にするワタシが間違っている。

たぶん世界中の各地におしゃれな人や感度のいい人はいて、その地元地

元で頑張っているんだろうな。

なにも大都会に出なければ、自分のおしゃれな表現ができない、ということはないのだ。そこのところは、見習わなくっちゃ、と思っている。

お店以外でも魅力的なところが多い。

例えば、街並み。明治時代の建物、歴史的建造物とでもいうのでしょうか。あの昔風でありながらモダン、という建物がけっこう残っていて、どこもきれいに保存してある。今ではつくれないような凝ったレリーフやシャンデリアなどを見るだけで、楽しい。

窓枠だけでも、いろんな発見があるし、タイルを眺めるだけでも飽きない。

この前は、ある洋館だけで、3時間も過ごしてしまった。

そんなインテリアの写真を撮るのが、趣味のひとつになっている。照明器具の写真だけで、何枚あることか。館内にカフェがあるところもあって、そこで寛いでいると、タイムスリップした気分になる。

そんな市内散策で見つけたのが、代官町にある、今いるお店だ。かわいい小

物がたくさんある。弘前に来てからは、着る服はぜんぶここで買っている。

そうして何回も訪れているうちに、店長と仲良くなって、おしゃべりだけでも楽しい時間を過ごせる場所となっている。

ここで午後三時にヒロと待ち合わせ。今日は、弘前市移住1周年の日。

その記念に、お揃いの食器を買うつもりなのだ。

Ⅱ　ヒロが歩けば

「よう、ヒロくん」

「あ、どうも」

「やあ、ヒロくん」

「あ、こんにちは」

通りを歩いているオレに、商店街の人たちが次々に声をかけてくる。
が、オレはサキとの約束があるので挨拶だけして先へ進んでいく。
いつもは、ひとりひとりと話をするのだが、するとすぐに1、2時間たってしまう。そんなことをしていたら、サキとの待ち合わせに遅れてしまう。
今日は遅刻しない約束。ここは心を鬼にして、通り過ぎる。
酒屋さんの前を通ると、「寄っていきなよ」と、いきなり袋を手渡された。
「はあ」
注文しておいたお酒だ。袋から出したら最後、このお酒の話で盛り上がっていくに違いない。遅刻厳禁、心は鬼。
「ありがとうございます、またこんど」といって先に進む。
弘前中央食品市場の中へ入る。
サキに頼まれた買い物をしなくてはいけない。
左右の店から挨拶、挨拶。
東京にいたころは、こんなに挨拶というものをしたことがあったろうか。

いつの間にか手に持っている袋がふえている。
「あれ、また何かもらったな」
市場を出て、知り合いのアンティーク・ショップの前を通る。
大きな荷物を2人でトラックの荷台からおろしている。
が、どうも重いらしく、ふらふらしている。
あ、落ちる。とっさに走って行って、段ボール箱の底を支えた。
「誰かと思ったら、ヒロくんか。いやー、助かった、助かった。今度、カウンター・スペースをつくろうと思ってさ、その椅子なのよ、この荷物。落としたら、脚が折れるとこだよ、危ない、危ない」
「へえ、カウンター・スペースですか。何を出すんですか」
「アンティークのコーヒーカップで、コーヒーを出そうと思っているんだけどね」
「へえ、いいですね、今度じっくり伺います」
興味はあったけれど、オレとしては素早く切り上げ、サキが待つ店へと急いだ。
遅刻はダメだ。

Ⅲ　ヒロとサキ

ひと通り店内を見回ったサキは、店長とコーヒーを飲みながら、雑談をしていた。

こんなひと時が、気持ちいい。

2階の窓からは、通りが見渡せる。

「ヒロはやっぱり遅刻だよ」

「汗だらけになっているね、きっと」

「あ、来た」

予想通り、汗だらけになって遅刻したヒロの腕には、紙袋が5つも6つもぶらさがっていた。

「どうしたの、これ」

「ふー、まあいろいろあって」

弘前公園の濠沿いの道を歩きながら、今日の献立を話し合った。ここは地元の人の散歩スポットで、とても静かでいい雰囲気だ。

「ヒラメの刺身にしよう、いいのがあったんだ」

食卓の上に、サキの手料理が並んだ。

「ありがとう」とヒロ。

「どうしたの、急に」

「いや、サキが弘前にひとりで旅立ったじゃない。その時はもうオレを見限ったのかと思ったんだよ。でもそれはなかなか行動しない、腰の重いオレの背中を押す手段だったんだよな」

「ふふ」

「ま、思い切った過激な手段だったよ。でもそうでもしなければ、オレは弘前に来なかったかも」

「かもね」

「そして、こんなにいい毎日を過ごすこともなかったかも」

「そうだね。今も東京にいたら、どうなっていたかな」

「こんなに笑顔になっていなかったことだけは確かだな」

「笑顔はふえたよね」

「サキ様のおかげです」

「なに？　あらたまっちゃって」

「今、第二の人生を始めているっていう感じがするんだ」

「ワタシもまったく同じ。それに弘前って、自然がいっぱいあるから、子どもを育てるにもいいところだよね」

「ん？」

「まあ、まあ。弘前移住1周年に、カンパイ！」

「カ、カンパ～イ！」

ひとまずおしまい

ヒロとサキ
連続移住小説
hiro&saki
移り住む先、弘前。